

平和を創り、守るために

～今、戦争を考える～



港区平和都市宣言

かけがえのない美しい地球を守り、世界の恒久平和を願う人びとの心は一つであり、いつまでも変わることはありません。

私たちも真の平和を望みながら、文化や伝統を守り、生きがいに満ちたまちづくりに努めています。

このふれあいのある郷土、美しい大地をこれから生まれ育つ子どもたちに伝えることは私たちの務めです。

私たちは、我が国が『非核三原則』を堅持することを求めるとともに、ここに広く核兵器の廃絶を訴え、心から平和の願いをこめて港区が平和都市であることを宣言します。

昭和60年8月15日

港 区

目次

港区平和都市宣言	
はじめに-「戦争」って何?-	01
戦争の時代へ	02
日清戦争と日露戦争	02
第一次世界大戦	03
中国への侵攻	03
戦争のための国づくり	04
軍都へ	05
兵役	07
拡大する戦火	08
アジア・太平洋戦争	08
戦火は国内へ	09
空襲の日々	10
前期の空襲	10
東京大空襲	12
後期の空襲	13
港区の空襲	14
戦争と暮らし	21
奪われた自由	21
隣組	22
生活用品の統制	23
防空	27
語り継がれる戦時下の暮らし	28
戦争と女性	29
女性の力	29
愛国婦人会と国防婦人会	30
戦争と子ども	31
遊び	31
教育	31
学童疎開	33
終戦、そして復興へ	34
8月15日	34
子どもたちの終戦	35
復興へ	36
おわりに-平和を創ること、守ること-	38
年表・近代の戦争と港区	39
主な参考文献	43

はじめに

－「戦争」って、何？－

「戦争」とは、国と国、あるいは人と人とが戦うこと、争うことです。しかし、ただ戦ったり、争ったりするだけでは「戦争」とは言いません。少し難しい言い方をすると、“戦いなさい”と命令された人々－軍隊や兵隊－が、いろいろな武器や兵器を使って、殺し合い、傷つけあうこと、それが「戦争」です。

人は、いつごろから、なぜ、戦うようになったのでしょうか。

考古学という学問から戦争のことを考えた佐原真^{まこと}先生は、本格的な戦争は、農耕社会とともに始まったと言っています。もちろん、狩りをしたり、木の実などを採ったりしながら暮らしていた狩りょう・採集社会にも戦いや争いはありました。しかし、戦う理由は、仲間を殺されたことや、人や物を盗まれたことへの復しゅうが多く、犯人をつかまえたり、犯人を殺したりしてしまえば戦いは終わります。相手が負けを認めるまで、徹底して人を殺すことはほとんどなかったと考えられています。

ところが、農耕社会が始まると、富む者と貧しい者、あるいは力のある者となない者との差ができるようになり、やがて、力のある少数の人が、大勢の人を支配するようになりました。こうして、人々の間に大きな戦いや争いが生まれてきました。

考古学では、人々が本格的な戦争を始めたのは、およそ8,000年前と考えています。現在、人類の歴史は400万年前までさかのぼるといわれていますから、本格的な戦争の始まりは、つい最近のことだということがわかります。

戦争は、19世紀の終わりごろから、大きく姿を変えました。それまで以上に、一度に多くの人に危害を与える方法が開発され、使用されるようになりました。1945（昭和20）年3月10日の東京大空襲^{だいくうしゅう}は、わずか2時間あまりの空爆で、10万人を超す死傷者を出し、被害を受けた人は100万人を超えたといわれています。また、同じ年の8月6日広島、そして9日長崎に落とされた原子爆弾^{げんしばくだん}は、一度に大勢の人の命を奪う近代戦争の恐ろしさを示しています。

本書は、第二次世界大戦のころの社会や人々の暮らしを、港区ならびに周辺地域の資料に基づいてつづったものです。「平和」を考えるためには、戦争について学ばなければなりません。本書が、戦争のころの暮らしや社会の様子を知り、「平和」について考えるための材料となることを願っています。

戦争の時代へ

日清戦争と日露戦争

明治時代に入り、豊かで強い国づくりを進めてきた日本は、日清※戦争（1894～1895年）と日露※戦争（1904～1905年）を経て、欧米の国々から力のある国として認められるようになりました。ことに、東アジアのはずれの小さな島国としか見られていなかった日本が、大国ロシアとの戦争を戦い抜いたことに、欧米の国々は大きな驚きを覚えました。

日清戦争で台湾を領土とした日本は、日露戦争で南満州鉄道や樺太（サハリン）の南側を手に入れ、やがて韓国（朝鮮）を支配しようとしてしました。これに対し韓国（朝鮮）の人々は激しく抵抗

※清：現在の中国

※露：現在のロシア



のぎたいしょうがいせんたいかんげい
乃木大将凱旋大歓迎の図（部分）

（港区立三田図書館『戦乱と港区』より）

日露戦争で活躍した乃木希典は、明治天皇の大喪の礼が行われた当日に赤坂区新坂町（現赤坂八丁目11番）の自宅で、夫人とともに自刃しました。自宅は、現在も同地に残っており（港区指定文化財）、年に3回、建物内部が公開されます。公開日には多くの人々が訪れます。

しましたが、日本の軍隊はこれを力で押え、1910（明治43）年、ついに韓国（朝鮮）を植民地としました（韓国併合）。

日清・日露戦争により日本は世界列強の仲間入りをしましたが、一方で戦争の重い費用負担のために苦しい生活を強いられてきた国民の間には、大きな不満が残りました。



自宅で過ごす乃木夫妻

（港区立郷土歴史館蔵）



旧乃木邸

第一次世界大戦

1914（大正3）年、ヨーロッパでは、イギリスやロシアなどの連合国と、ドイツやオーストリアなどの同盟国との間で戦争（第一次世界大戦）が起きました。イギリスと同盟を結んでいた日本は、連合国側の一員として戦争に加わり、ドイツが支配していた中国の青島を攻め落とすと、続いて南太平洋のドイツ領の島々を支配しました。1915（大正4）年には、日本政府は中国に「21か条の要求」を認めさせ、中国での^{チンタオ}権益を広げていきました。

第一次世界大戦によって、日本の産業は急成長をとげ、不況に苦しんでいた日本に好景気をもたらし、人々の暮らしぶりも大きく変わりました。

しかし、戦後の好景気は長続きしませんでした。1920（大正9）年には戦後^{きょうこう}恐慌が起り、1923（大正12）年に南関東地方をおそった関東大震災は、日本の経済に大きな損害を与え不景気はさらに深まりました。そして、1929（昭和4）年にアメリカで始まった^{せかいきょうこう}世界恐慌の影響が、翌年には日本にもおよんできました。

中国への^{しんこう}侵攻

第一次世界大戦が終わると、国際連盟がつくられ、平和な世界をつくるための努力が始められました。日本も初めは、国際社会の一員として世界平和をめざしました。しかし、不況が続き、社会がますます混乱するにつれ、国内の情勢を立て直すために中国へ勢力を伸ばそうとする考えが広まり、日本と^{おうべいれっきょうかん}欧米列強間での中国をめぐる権益の奪い合いが止まることはありませんでした。

1931（昭和6）年9月、満州（中国東北部）にいた日本軍が中国軍を攻撃し、^{まんしゅうじへん}満州事変が起きました。中国は、11月に日本軍の行動を国際連盟に訴えますが、満州を占領した日本軍は翌年、満州を中国から切りはなし、^{こうていふぎ}皇帝溥儀をむかえて「満州国」をつくりました。さらに、^{シャンハイ}上海の中国軍に総攻撃を加えました。

1933（昭和8）年1月、日本軍は本格的な中国侵攻を開始します。そして、満州での軍事行動を各国から非難された日本は、同年3月27日、ついに国際連盟を脱退し、国際社会の中で孤立を深めていきました。

戦争のための国づくり

満州事変が起きたころ、国内では軍部を中心とした政権をつくろうとする人々が現れ、しばしばクーデター計画がたてられました。そして1932（昭和7）年5月15日、海軍将校ら18名が、首相官邸、警視庁などを襲撃する事件（5.15事件）が起きたのです。

5.15事件は、事件を起こした将校らが東京憲兵隊に自首して幕を閉じました。しかし、この事件で首相の犬養毅が暗殺され、政党に代わり、軍部が政治を担う時代が訪れました。

5.15事件の後、軍部では強硬派が力を強めていき、1936（昭和11）年2月26日、再びクーデター事件（2.26事件）が起きました。

この日早朝、21名の青年将校に率いられた歩兵第一・第三連隊と近衛歩兵第三連隊など1,400名余が、数隊に分かれて首相官邸や政府の重要な人物の邸宅など15か所を襲撃しました。



2.26 事件時、歩兵第一連隊前を通る戦車
（写真撮影：同盟通信社）

2.26 事件で、時の首相の岡田啓介は難を逃れることができたが、大蔵大臣の高橋是清、内大臣の齋藤実らが殺害されました。

この時、高橋是清は、赤坂区表町三丁目（現赤坂七丁目3番）の自宅で就寝中に襲われました。

2.26事件は、勃発から4日後に反乱軍が鎮圧されておさまりましたが、その後は軍部が力をますます強め、日本は軍国主義の時代に突入しました。



高橋是清像（上）と高橋是清邸跡（下）

高橋是清は、その風貌からだるま宰相と呼ばれました。高橋邸の家屋は、東京都たてもの園に移設されましたが、跡地は現在、高橋是清翁記念公園として整備されています。

ぐんと 軍都へ

明治時代、東京には数々の軍事施設がつくられ、多くが終戦まで使われてきました。特に、港区内には多くの軍関係施設が置かれました。

1871（明治4）年、愛宕町の旧柳沢邸に兵営が設置され、1873（明治6）年、旧伊予松山藩上屋敷跡地（現、西新橋三丁目）に東京鎮台歩兵第一連隊第一大隊、ちやうしゅうはん しちや しき あとち長州藩下屋敷跡地（現、赤坂九丁目）には、第二・第三大隊が駐屯することになります。また、この年、高輪の熊本藩下屋敷跡地には軍の医療機関が置かれます。

その後も、赤坂、青山地区を中心に連隊や司令部の数が増加します。1886（明治19）年には青山練兵場れんべいじやうが設置され、1891（明治24）年には陸軍大学校が青山北町一丁目（現、北青山一丁目）に移転してきます。

近代の港区は、いわば「軍都」の中心であったといえるかも知れません。



青山練兵場

（『東京写真帖』より）



歩兵第一連隊営門（1936（昭和11）年撮影）

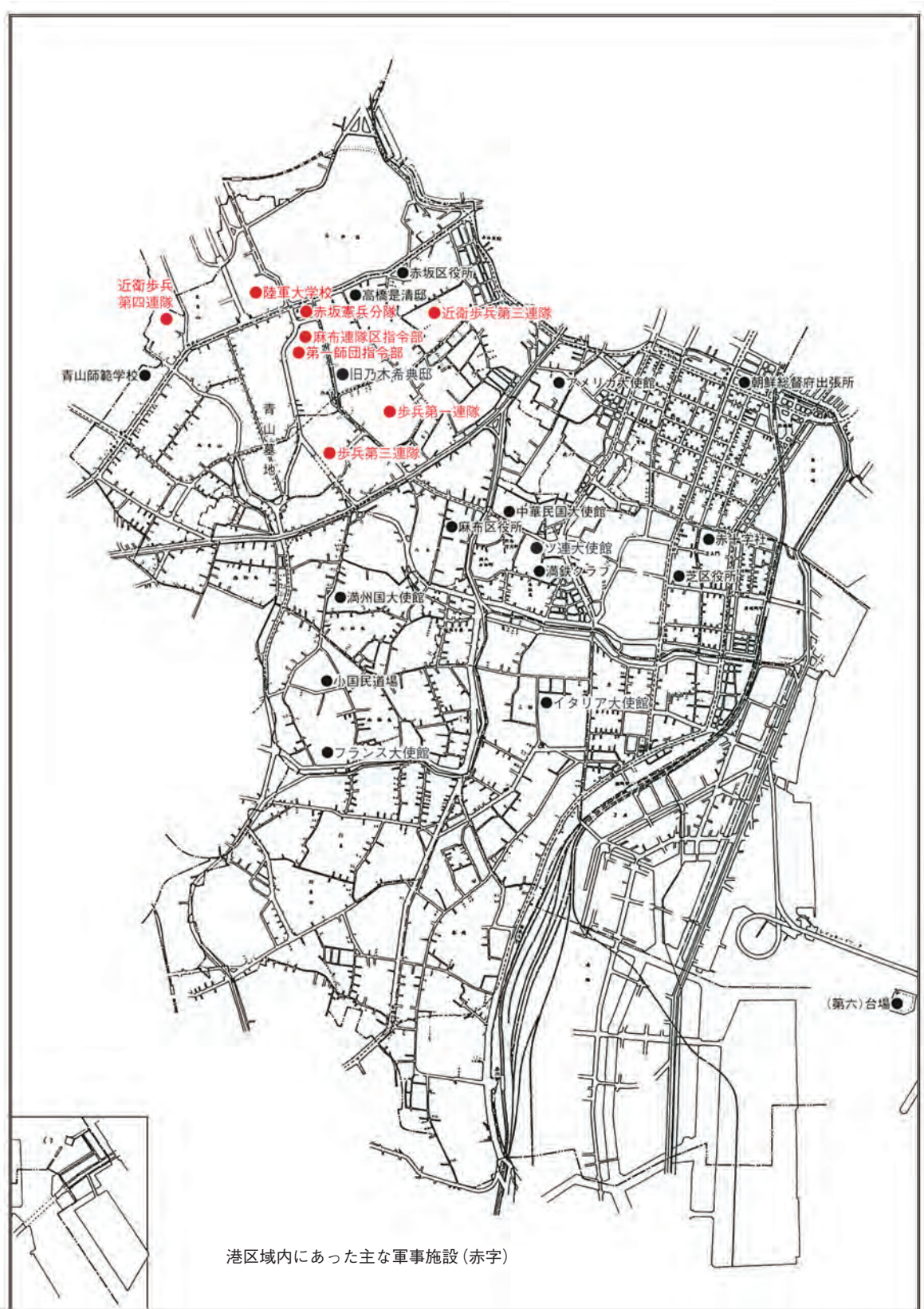
（写真撮影：同盟通信社）



旧歩兵第一連隊本部（1992（平成4）年撮影）

（港区立郷土歴史館蔵）

この建物は、歩兵第一連隊本部として1929（昭和4）年8月に竣工、戦後は防衛庁（現、防衛省）庁舎として使われてきましたが、2001（平成13）年、再開発事業に先立ち解体されました。既述の2.26事件は、近代日本史上、最大のクーデターといわれていますが、この折、歩兵第一連隊からは450余名が決起側に参加しました。



兵役

明治時代以降、終戦まで、日本は大日本帝国憲法のもと、男子に兵役の義務を課していました。

男子は満 20 歳になると徴兵検査を受け、そこで甲種・第一乙種・第二乙種・丙種（以上、合格）・丁種（不合格）・戊種（翌年再検査）に振り分けられました。

このうち、甲種・乙種は現役兵に適する者、丙種は現役兵には適さないものの国民兵役に適する者とされ、初めのうちは概ね甲種合格者のみが現役兵として入営し、乙種は補充兵に編入されていました。しかし、日中戦争の拡大と長期化に伴い現役兵が不足するようになると、乙種の上位まで現役兵として徴用するようになり、やがて現役兵を終えていた者を

再び徴用したり、さらには徴兵対象年齢を 18 歳にまで引き下げたりするなどして、兵士を確保するようになりました。

入隊は、1 枚の召集令状（赤紙）によって命じられました。戦時中、区役所の兵事係の職員であった S・N さんは、召集令状の取り扱いに当たる兵事係が、非常に緊迫した職場であったと語っています。

召集令状（赤紙）は、多くの若者の人生を変えました。日本軍が真珠湾攻撃を行う前年に召集された I・E さんは、赤紙 1 枚で青春の運命を変えられてしまったこと、入隊まで複雑な心境であったことを、また、1941（昭和 16）年に入隊した H・W さんは、徴兵検査に合格し入隊したことを当初は誇りに感じていたと、記憶の中で次のように振り返っています。

H・W さんの記憶

思えば昭和十六年八月私は国民の義務である徴兵検査を受ける事を誇りと思っていた。・・・
二月一日東京赤坂松町近衛歩兵聯隊に入営した。
当日の入隊者の初年兵は約千二百余名であった。

I・E さんの記憶

昭和十五年七月一日、この日を境に私の青春の運命が一変してしまった。召集令状という通称赤紙は、いとも簡単に社会生活を営んでいるものを壮丁という名で兵舎の門をくぐらせてしまう。
当時、芝区生まれで昭和九年次徴集の私は麻布聯隊区で甲種合格であったなら、赤坂の歩兵第一聯隊に入営するのだが、第二乙種というので軍隊生活には補充兵で、縁がないものとおもっていた。
支那※事変が長びいて、友人の一人二人と召集をうけ出征兵として歓呼の声におくられて行くが、私のところには来ないのかも知れないという思いもあったが、現実のものとなって戸惑ったが度胸をきめざるを得なかった。

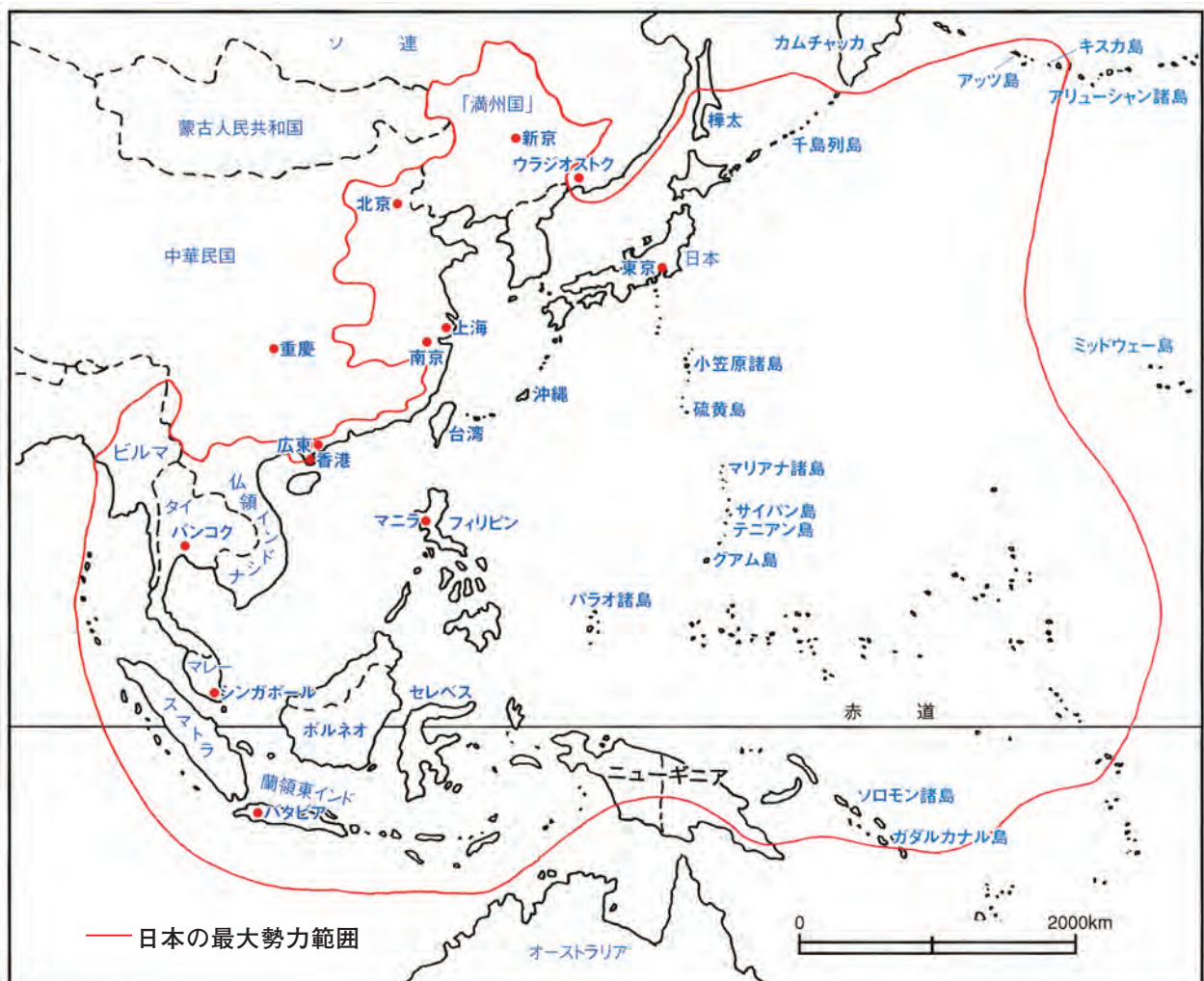
※支那…現在の中国

アジア・太平洋戦争

1941（昭和16）年12月8日、日本陸軍がイギリス領マレー半島への上陸を開始しました。日本時間の午前2時15分のことです。続いて、同じ日の午前3時19分、日本海軍がハワイ真珠湾への空爆を開始しました。ここに、アジア・太平洋戦争が始まったのです。

はじめのうち、日本軍は各地で勝利をおさめました。当時のラジオ放送はニュースのたびに、軍艦マーチに続いて「皇軍大勝利」のニュースを伝えました。

翌1942（昭和17）年1月2日、日本軍はマニラ（現フィリピン）に入り、1月11日にはクアラルンプール（現マレーシア）を占領しました。2月15日にはシンガポールを占領、3月に入るとジャワ、スマトラ、セレベス、チモール（現インドネシア及び東ティモール）が日本軍に降伏、3月末には、西はビルマ（現ミャンマー）、東はラバウル（現パプアニューギニア）、南はチモール（現インドネシア及び東ティモール）まで、日本軍の勢力は広がりました。



戦時中の日本の領土

戦火は国内へ

しかし、1942（昭和17）年6月5日に始まったミッドウェー海戦で日本の連合艦隊が大敗すると、日本軍の形勢は不利となっていき、翌年の2月1日にはガダルカナル島の日本軍の撤退が始まります。

ガダルカナル島の戦闘で日本陸軍は、およそ21,000名の戦死者を出します。これに対して、アメリカ陸軍と海兵隊の戦死者は1,796名でした。ところで、ガダルカナル島での戦死者21,000名のうち、直接の戦闘による死者は5～6,000名で、多くが病気や栄養失調症により落命していたことが、その後の研究で明らかにされています（吉田裕『シリーズ日本近現代史⑥ アジア・太平洋戦争』）。

ウェーキ島で終戦を迎えたF・Sさんの語りに耳を傾けてみましょう。

5月29日にはアッツ島の日本軍が、1944（昭和19）年7月7日にはサイパン島の日本軍が全滅しました。

8月には、テニアン島、グアム島の日本軍が全滅し、さらに10月24日、レイテ沖海戦で、日本の連合艦隊が再び立ち直れないほどの打撃を受けました。

アメリカ軍は、いよいよ日本本土に近づき、1944（昭和19）年11月24日、東京が初めてB29爆撃機による空爆^{くうばく}を受けました。沖縄にアメリカ軍が上陸したのは、1945（昭和20）年4月1日のことでした。

F・Sさんの記憶

私は二・二六事件の翌日（昭和十一年二月二十七日）あの雪深い東京駅を発って満州興安嶺の戦車隊に入隊。・・・昭和十五年九月仏領印度支那^{ふりやういんどしな}ハノイ進駐。大東亜戦争でラバウル、ニューギニアと経てウェーキ島で終戦。・・・米軍は中央ルートを諦め^{あきら}・・・グアム、フィリッピンと攻略したためウェーキ島は糧秣^{りやうまふ}を絶たれ減食のやむなきに至りました。朝食は乾パン（二百三十グラム）を四人で一袋（一人一二ほど）金平糖^{こんぺいとう}三個、夜は二十グラムの米（湯吞茶碗一杯の御飯）で、サザエ等の貝類や内海の珊瑚礁^{さんごしょう}に附着した蟹等は食べ尽くし荷物等に繁殖した鼠なども食いました。渡り鳥が卵を生むのですが、小さな島に三千五百人の口にはほど遠く栄養失調による病死が続出、陸海軍で二千五百人は亡くなりました。

くうしゅう ひび 空襲の日々

前期の空襲

1942（昭和17）年4月18日午前8時30分、東京に警戒警報が出されました。昼近くになり、高射砲※をうつ音がまちの中にひびきわたると、当時、アメリカで最も性能が高かったノースアメリカンB25爆撃機から爆弾と焼夷弾が落とされました。東京が空襲を受けた最初の日です。この日、B25は16機で飛来し、品川区や荒川区などに約500発の爆弾と焼夷弾を落としました。この空爆で約250名の人々が死傷しました。

※高射砲：地上から戦闘機を射撃する武器

次いで東京が空襲に見舞われたのは、最初の空襲から2年余りが過ぎた1944（昭和19）年11月24日のことでした。

昭和19年に入ると、海外で戦っていた日本軍は、各地で敗北を重ねるようになり、マリアナ諸島など、本土を守る上で重要な基地をアメリカ軍に奪われていきました。アメリカ軍は、これらの基地に、すでに開発が完了していた新型爆撃機ボーイングB29を配備し、日本各地の都市を空爆しました。B29はB25をはるかにしのぐ高性能爆撃機でした。



「戦災焼失区域表示 帝都近傍図」— 1946（昭和21）年—

（港区立郷土歴史館蔵）

日本軍が前線基地を次々と失うにつれ、B29による空襲は激しさを増してきました。東京は11月24日の空襲に続き、11月27日、11月30日、12月3日、12月27日など、暮れに向けて数回にわたり空爆を受けました。

年明けの1945（昭和20）年は、1月1日の午前0時5分、B29爆撃機6機が、現在の江戸川区や墨田区などを襲い元旦から空襲が始まりました。

その後、東京は、ほぼ一日おきに空襲を受けました。その日数は、1月は元日を含めて18日、2月は8日に及びました。この間、特に大きな被害をもたらした空襲を見ておきましょう。

1月27日、午後1時過ぎに始まった空爆は午後3時20分まで続き、現在の千代田区、中央区、台東区などが襲われ、236名の死者が出ました。港区内でも負傷者が出ています。

2月9日には、B29爆撃機およそ100機による空襲がありました。

2月16日の空襲は関東地方各地に及び、都内では大田区、渋谷区、葛飾区、世田谷区、立川市などが襲われました。翌日も空襲に見まれ、都内の各所で被害が出ています。

2月25日午後の空襲は、2月最大の被害をもたらしました。午後2時15分に始まった空襲は、約2時間に及び、港区内はもとより、現在の23区のほぼ全域が被災しました。死者は142名、焼けたり壊れたりした家は約35,000戸、被災した人は72,818名と記録されています。

3月に入ると空襲はますます激しくなり、4月には、都内の各地が空襲に見まれ6,000名以上の被災者が出ました。



B29 爆撃機の襲来

（『東京大空襲秘録写真集』より）



焼夷弾

（港区立郷土歴史館蔵）

1007

「3月10日 9日22時30分警戒警報発令、10日0時15分空襲警報発令、それから約2時間半にわたって空襲が行われた。来襲機はB29 150機と数えられ、単機あるいは数機づゝに分散して低空からはじょうじゅうたげきを、波状絨緞爆撃を行った為、多数の火災が発生して、烈風により合流火災となり、東京の3割を焼き、甚大な被害を生じた。」

東京大空襲で、現在の江東区、墨田区、台東区を中心に、9万人を超える死者が出ました。けがをした人は、6万人以上とも、10万人以上ともいわれており、行方不明者の数はわかりません。



(『東京大空襲秘録写真集』より)

（岩波書店 一九九四）『荷風全集』第二五卷

ながいかふう だんちょうていにちじょう
永井荷風の日誌 (『断腸亭日乗』) -3月9日-より

小説家・永井荷風は、1920（大正9）年から、麻布区市兵衛町一丁目（現六本木一丁目）に暮らしましたが、3月10日の大空襲で家が焼け落ちてしまいました。荷風はその様子を、日誌に詳しくつづっています。

後期の空襲

1945（昭和20）年3月10日の東京大空襲は、日本史上もっとも大きな悲劇の一つといってもいいでしょう。

3月10日以降、東京を標的とした大きな空襲は、しばらくはありませんでしたが、4月4日、160機ほどのB29爆撃機による空襲により、都内でかなりの被害が出ました。

次いで、4月13日から14日にかけての空襲では、64万人を超える人々が被災し、さらに4月15日から16日の空襲によって、21万人を超す被災者が出ました。

5月には、主に山手地区^{やまのて}を標的とした最後の大規模な空襲に見まわられました。

ことに5月24日未明と25日夜半の空襲による被害は甚大で、港区を含む都心の大半が焼失しました。

6月に入ると、空襲の標的は、多摩地区や伊豆七島に移っていき、1945（昭和20）年8月13日、都心を標的とした最後の空襲がありました。

都内では8月15日午後1時20分、8機の爆撃機が青梅市を襲い、22名の被災者が出ました。これは終戦を告げる放送が開始されて1時間以上が過ぎてからのものでした。これが、東京最後の空襲でした。

『東京都戦災誌』は、都内で死亡した人94,225名、重傷を負った人33,974名、軽傷を負った人99,366名、6,994名が不明と記しています。また『新修 港区史』には、港区内で100,000名の人々が被災したと記されています。もちろん、こうした数は決して正確なものではありません。

しかし、ほとんど全ての被災者が、約110回にもおよんだ空襲^{ぎせいしや}の犠牲者です。このことから、戦争がいかにむごい事であったかが分かります。



東京大空襲後のようす（一部、改変）

（写真提供：東京大空襲・戦災資料センター）

港区の空襲

港区内の空襲の経過を、19頁から20頁の表とともに見ていくことにしましょう。

港区が初めて空襲を受けたのは、1944（昭和19）年11月24日でした。この日、太平洋上に浮かぶマリアナ諸島を飛び立ったB29爆撃機80機が、武蔵野町（現武蔵野市）の中島飛行機株式会社とその周辺を集中的に空爆しました。中島飛行機株式会社は第二次世界大戦中、戦闘機をつくっており、武蔵野町にはその工場がありました。武蔵野町を襲ったB29爆撃機が、その後港区方面に向かい、東京湾に浮かぶ第5・第6台場に爆撃を加えました。

区内で大きな被害を出した最初の空襲は、1944（昭和19）年11月30日の空襲でした。空襲は、夜中の0時15分から午前2時35分まで続き、浜松町や六本木などが被害を受けました。警視庁は、この空襲により、都内で158名の死傷者がで、罹災者は9,112名にのぼったと発表しています。

次いで、12月27日、B29爆撃機250機による空襲がありました。旧芝区新堀町と旧麻布区宮村町が被害を受け、5名の負傷者が出ました。

1945（昭和20）年1月27日には、旧赤坂区の福吉町と新町に、爆弾と焼夷弾が一発ずつ落とされています。

2月25日、東京は2回の空襲に見まわれましたが、港区内は2回目の空襲で、青山南町や青山北町などが被災しました。

主に東京下町を襲った3月10日の大空襲は、旧芝区を中心に大きな被害をもたらしました。『港区史』によれば、旧芝区で10,681名が被災し、3区（旧芝区・旧麻布区・旧赤坂区）で4,500戸以上の家が焼けました。この空襲について『港区史』は、「人類文明の進歩にそむいた一大悲劇」と表しています。

4月4日には、旧芝区の4か所に爆弾や焼夷弾が落とされ、1,050名の人々が被災しました。

4月13日から14日にかけての空襲は、3月10日におとらぬほどの大きなものでしたが、幸い区内では旧赤坂区の一部で被



おんだかのり
恩田孝徳画「麻布十番通りを望む」（4月17日）

害が出ただけでした。ところが、翌15日から16日の空襲では、旧芝区や旧麻布区で、8,600名を超える人びとが被災し、3,000戸近い家が焼け落ちました。

5月23日、午前2時10分に始まった空襲により、旧麻布区の桜田町から飯倉町、^{こうがい}筈町、新堀町などが被災しました。

翌24日、港区内は15,000名を超える被災者を出す大きな空襲を受けました。この日の空襲は午前1時36分から始まり、およそ2時間20分におよびました。3区の被害状況を見ると、焼けた家4,182戸、死者15名、重軽傷者238名となっています。

当時、旧赤坂区に住んでいたM・Kさんは、5月24日の空襲のことを、次のように語っています。



アメリカ大使館がみえる麻布の焼け跡



赤坂区役所前の^{りさい}罹災者

(写真はいずれも『東京大空襲秘録写真集』より)

M・Kさんの記憶

五月二十四日、この夜は強い風が吹いていた。こんな夜に空襲でもあったら、三月十日の二の舞になるのではと不安で落ち着けなかった。すでにラジオは、B 29の数編隊が南方洋上にあり関東地方を襲う公算大なり、続いて東京地区に向かう、と警報が出されていた・・・

長く尾を引くサイレンの音が鳴り止まぬ間に、敵機の爆音が頭上を通過した。低空を飛ぶ銀色の機体が驚くほど大きく見え、^{だんそう}弾倉が開いて、バラバラと投下する焼夷弾が斜めに頭上を落下し、民家の屋根に吸い込まれてゆく。赤坂田町方面に発生した火災は黒煙とともに燃え盛っている。後続の敵機が^{ごうちん}轟音を残して次々と通過する。麻布谷町あたりが燃える。私たちの町一帯へ煙が流れ込み、火の粉が舞い上がる。我が家の屋根を貫いた一弾は玄関で破裂し、同時に白い油脂が四方に飛び散り、直ちに発火し燃え広がった。この町内には、消火に従事する男手も女手もほとんどなかったため、消火に立ち向かう^{すべ}術もなく焼けるにまかせるだけである。

港区内は、5月25日にも大規模な空襲を受けました。この空襲は夜遅くに始まり、翌日の早朝まで続き、皇居が被災し、旧赤坂区役所が焼け落ちました。

死者は、旧芝区で131名、旧麻布区で69名、旧赤坂区で552名、被災した人は3区で113,000名に達しました（『港区史』下巻）。

旧芝区に住んでいたI・Kさんは、5月25日の空襲について、右のように語っています。

こうした5月の大きな空襲により、区内の町々の多くが焼失しました。

港区内の最後の空襲は、1945（昭和20）年8月13日でした。午前8時から12時にかけて、旧芝区が襲われました。

港区では空襲により、旧芝区のおおよそ30%、旧麻布区・旧赤坂区のおおよそ70%が焼失しました。被災者は140,000名を超えたといわれています（『港区史』下巻）。



芝東照宮のイチョウ

I・Kさんの記憶
また、五月二十五日（旧海軍記念日）の大空襲の時、夕方より明け方までB29からの爆弾や焼夷弾が雨のように落下し、部隊が丸焼けになり、私共衛生兵は、兵隊の救護と治療のために逃げる事も出来ず、二十六日の明け方防火用水をかぶり、やっとの思いで外に逃げる事が出来た次第でした。・・・



昭和20年5月25日空襲青山方面の死者

（『東京大空襲秘録写真集』より）

1945（昭和20）年3月10日と5月25日の空襲は、芝公園一帯に甚大な被害を与えました。この空襲で、増上寺、徳川家^{れいびょう}霊廟ならびに東照宮の建造物の多くが焼け落ちました。これらの中には、国宝に指定されているものもありました。ところで現在、東照宮の境内に、高さ25.5m、目通り※の幹の周囲6.45mを測るイチョウの木（東京都指定文化財・天然記念物）がそびえています。この木は樹齢が350年を超えていると考えられており、空襲を免れた貴重な歴史の証人でもあります。

※立木の目の高さの位置。おおよそ1.5m位。



米軍機から撮影された燃え上がる青山付近

(写真提供：東京大空襲・戦災資料センター)



「麻布宮村町にて」(5月28日)



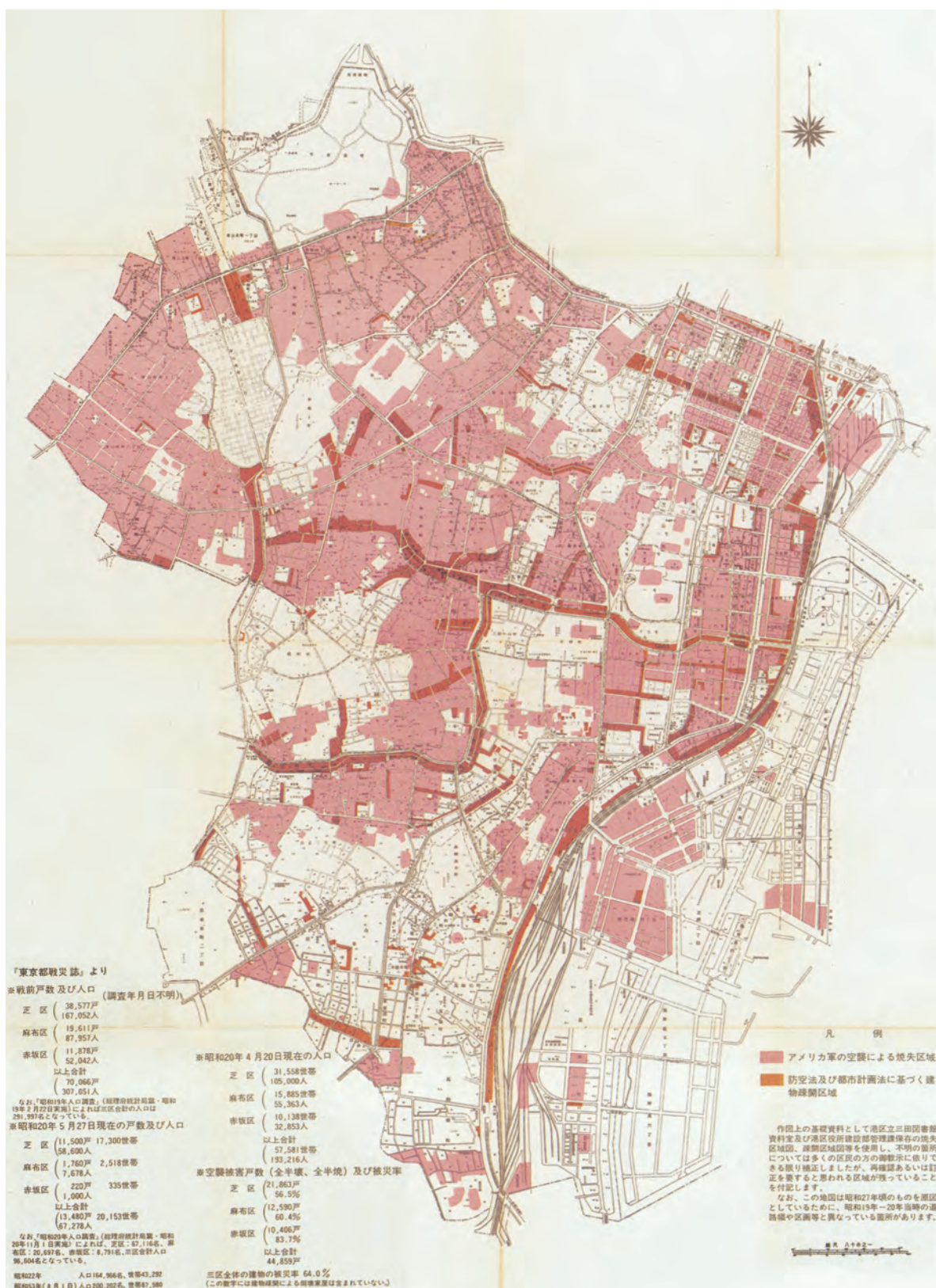
「金杉橋にて」(6月21日)



「三田・慶大前にて」(6月11日)

おんだたかのり
恩田孝徳さんが描いた戦時下の港区

恩田孝徳さんは、1932（昭和7）年東京市南山
じんじょう
尋常 高等小学校に勤務し、1945（昭和20）年
4月から12月まで、空襲を受けた都心のような
すを90枚の水彩画に描きました。恩田さんは、
1959（昭和34）年に港区立南山小学校を退職し、
翌年、郷里の鳥取県で亡くなりました。



港区の空襲焼失区域 (『新修 港区史』付図より)

空襲にあった日	被害にあった港区内の地域	亡くなった 人の数	傷ついた 人の数	焼けた 建物の数	壊れた 建物の数	被害にあった 人の数
1944 (昭和 19) 年	11 月 24 日 芝区第5・第6台場	—	—	—	—	—
	11 月 27 日 赤坂区青山南町5丁目	—	—	—	—	—
	11 月 30 日 芝区浜松町2丁目、宮本町1丁目、芝公園7号地、栄町、麻布区六本木町、 飯倉片町、飯倉1・2・3丁目	32 *	126 *	38 *	2,914 *	9,112 *
	12 月 27 日 芝区新堀町、麻布区宮村町	—	5	—	1	—
1945 (昭和 20) 年	1 月 9 日 芝区東京港	0	0	0	0	0
	1 月 27 日 麻布区飯倉片町、赤坂区福吉町、新町	—	11	—	1	—
	2 月 9 日 赤坂区青山南町6丁目	?	?	?	?	?
	2 月 17 日 赤坂区青山3丁目 (南町・北町のいずれかは不明)	—	1	—	—	—
	2 月 19 日 赤坂区青山南町6丁目	3	10	—	11	50
	2 月 25 日 赤坂区青山南町1・2・5・6丁目、青山北町3・6丁目	2	2	47	—	220
	3 月 10 日 芝区汐留町、新橋3・4丁目、芝公園3・4・5・20号地、田村町3・4・6丁目、 愛宕町1・2丁目、西久保広町、西久保八幡町、神谷町、琴平町、西久保巴町、白金三光町	77	240	2,892	—	10,682
		40	57	1,222	—	4,317
		1	2	61	—	315
	4 月 4 日 麻布区飯倉町、我善坊町、仲野町、市兵衛町、簗筒町、今井町、三河台町	38	37	35	33	1,050
	4月13・14日 赤坂区榎田原町、檜町、青山南町1・2・5・6丁目、青山北町1・4・6丁目	3	1	24	—	125
	4月15・16日 芝区新橋2丁目、田村町2・3・4・5丁目、愛宕町1・2・3丁目、神吉町	—	10	1,480	—	4,601
	麻布区市兵衛町、狸穴町、我善坊町、新網町1・2丁目、永坂町、坂下町、網代町、 宮下町	40	8	1,400	—	4,000
5 月 24 日	5 月 23 日 麻布区桜田町、飯倉町、筈町、新堀町、北日ヶ窪町、東鳥居坂町、霞町の一部	—	—	—	—	—
	芝区西久保桜川町、南佐久間町2丁目、汐留町、新橋3・4・5丁目、田村町2・3・5・ 6丁目、新堀町、白金今里町、白金三光町、白金志田町、高輪南町、高輪台町、 二本榎町、田町、車町、伊皿子町、三田1丁目、綱町、豊岡町、三田四国町	11	171	2,848	—	10,086
	麻布区鳥居坂町、新堀町、田島町、富士見町、本村町、龍土町、新龍土町、霞町、 竹町、北日ヶ窪町、筈町、材木町、飯倉片町	3	50	1,084	—	4,321
	赤坂区青山南町1・5丁目、青山北町6丁目、高樹町、新坂町、新町3丁目	1	17	152	—	657

空襲にあった日	被害にあった港区内の地域	亡くなった 人の数	傷ついた 人の数	焼けた 建物の数	壊れた 建物の数	被害にあった 人の数
1945 (昭和 20) 年	5月25・26日	120	1,012	11,700	—	40,300
	芝区愛宕町、三田門前仲町、芝公園2～5号地、琴平町、巴町、田村町1・2丁目、今入町、片門前町1～3丁目、宮本町、明舟町、新橋1～7丁目、浜松町1～4丁目、白金台町1・2丁目、白金今里町、海岸通3丁目、三田1～3丁目、松本町、西芝浦1～4丁目、田町6～8丁目、本芝1～4丁目、赤羽町、芝浦1丁目、三田四国町					
	麻布区の大半					
	赤坂区の大半	551	1,150	9,961	—	30,660
	5月29日	—	11	7	—	11
8月13日	芝区高浜町、高輪南町	4	4	—	8	51
	芝区白金三光町					

表 港区内の空襲

- 港区が被害を受けた空襲をまとめました。主に、『東京都戦災誌』（昭和28年、東京都刊行）を使用し、『港区史 下巻』（昭和35年、港区刊行）で補いながら作成しました。区・町名は、住居表示前の旧町名を使ってあります。現在の地図をもとに、被害にあった地域を調べてみました。
- 『東京都戦災誌』に数値が書かれていないところは、「—」であらわしました。
- 1944（昭和19）年 11月30日の空襲被害数は、その日空襲を受けた都内全域の数です。
- 『東京都戦災誌』には、調査した日時によって、同じ日の空襲でありながら、異なった被害者数や家の数が記入されています。
この表では、最も大きい値を採用しました。
- この表に書かれた数値は、空襲の被害者数と被害を受けた家のすべてではありません。
- 10—16頁に記載した空襲の被害状況を示す数値は、特に断わりのないものは『東京都戦災誌』に基づいています。

戦争と暮らし

奪われた自由

戦争は、人々の暮らしに大きな影響を与えました。男性の多くは戦場へ動員され、子どもや女学生も工場などで働かされました。当時の政府は、戦争に協力しない人や、いろいろな理由で協力できない人を「非国民」と呼び、こうした人々や戦争へ協力的でない活動、考え方を、きびしく取り締まりました。

軍や政府は、「非国民」を出さない対策として、隣近所^{となりきんじよ}どうしが監視し合う仕組みまで作り上げました。

1937(昭和12)年、日中戦争が始まると、国民精神総動員運動が政府によって進められるようになりました。この運動は、戦争を最後までやりぬこうとする心がまえだけではなく、戦争を勝ち抜くために節約や

貯蓄にはげみ、また楽しみをがまんすることなど、生活そのものを戦争のために変えようとする運動でした。このころから、戦場へ行く兵士の見送りや千人針を呼びかける姿が毎日のように見られるようになりました。こうした運動は、町会や隣組^{となりぐみ}を通して日常的に行われました。

1938(昭和13)年4月には、国家総動員法が公布され、議会が認めなくても、必要なときに必要な人と物を戦争のために動かすことができるようになりました。



品川駅前での見送りの様子

(『東京大空襲秘録写真集』より)



愛国百人一首ゑはがき

(港区立郷土歴史館蔵)

国を愛する情熱をよんだ和歌百首を、絵はがきにしたもので、国民の戦争への気持ちを高めるためにつくられました。



寄せ書き

(江東区教育委員会蔵)

出征する兵士の無事や安全を祈るために贈られたものです。

隣組

隣組は、約 10 軒を一組としてつくられました。東京で初めて隣組の名前が使われたのは、1938（昭和 13）年 5 月のことです。1940（昭和 15）年 5 月には、港区内に 5,426 組（旧芝区 3,059 組、旧麻布区 1,327 組、旧赤坂区 1,040 組）の隣組がありました（江波戸昭『戦時生活と隣組回覧板』）。

隣組の重要な役割は、情報を伝えること、互いに助けあうこと、互いを監視し合うこと、の 3 つでした。

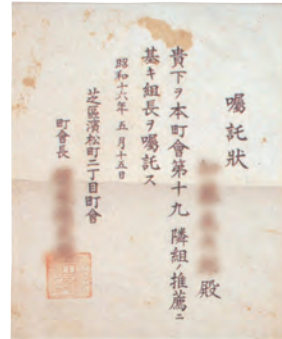
戦時中、政府が出す政策のうち、重要なことがらだけをまとめて各家庭に伝える仕組みが「回覧板」でした。「回覧板」は、政府や役所が出す情報を多くの人々に簡単に伝達すると同時に、隣どうしが、それぞれの家庭のようすを監視し合うことにも役立ちました。



1940（昭和15）年に皇紀2600年を記念して製作された急須と湯呑み碗

（港区立郷土歴史館蔵）

急須には「一億一心」、湯呑み碗には「隣組一家」の文字が染め付けられています。



となりぐみくみちょうしょくたくじょう
隣組組長嘱託状

（港区立郷土歴史館蔵）

1940（昭和 15）年 9 月になると、隣組は全国的に広まり、隣組の役割はますます大きくなりました。その一つとして、戦争に関するいろいろな事務手続きが、政府から都道府県知事、町内会・部落会とまわり、隣組を通じて行われるようになりました。また、住民の登録、食べ物や衣服など重要な生活用品の配給、防空活動、罹災証明なども隣組の重要な任務となりました。さらに、隣組常会が開かれるようになり、国民全員の出席が求められました。戦争をやりとげるために国民の意識を高めることも、隣組の活動として大切なものでした。

しかし、こうした隣組の活動は、助け合いといえば聞こえはいいのですが、結局は互いを監視し合う活動につながっていきました。

隣組は、終戦後、1947（昭和 22）年 5 月のポツダム政令によって廃止されました。

生活用品の統制

戦争が長びくにつれ、食料や日用品が足りなくなり、戦闘機や軍艦、武器などの材料となる金属やゴムなどが自由に使えなくなりました。

◆衣類

衣服だけではなく、衣服をつくる材料も配給制となっていくきます。

1937（昭和 12）年に綿の糸が割当制になり、さらに 1942（昭和 17）年 2 月には点数式の衣料切符が使われるようになりました。衣料切符は、甲種（一人 80 点）と乙種（一人 100 点）があり、港区などの都市では、乙種が現金と一緒に使われました。

国民の服装も統制されていきました。すべての男子国民は、国民服の着用が求められました。その主な目的は、戦争のための資源の確保でしたが、国民服は、なかなか広まらなかったようです。そこで政府は、1940（昭和 15）年 11 月 2 日に国民服令を出し、国民服を甲号と乙号にまとめました。デザインは、懸賞応募^{けんしょうおんぼ}というかたちのコンテストで決められました。甲号はスーツとして、乙号は作業服として使われたようです。

また同時に、女子の服装も質素なものに変わっていきました。1942（昭和 17）年には婦人標準服が厚生省から発表されました。各家庭では、和服（着物）をつぶして標準服を仕立てました。



衣料切符〈乙〉

（港区教育委員会蔵）

1943（昭和 18）年 2 月 1 日から 1945（昭和 20）年 1 月 31 日までを使用期間としたものです。衣料切符は終戦後も発行され、実質的な廃止は 1950（昭和 25）年 3 月のことでした。



婦人標準服と防火担任者たすき

（江戸東京博物館蔵）

婦人標準服には、洋服式の甲型、和服式の乙型、一部式、二部式、防空服の 5 種がありました。



国民服（甲号）

（港区立郷土歴史館蔵）

◆食品類

戦争が激化するにつれ、食品類が不足するようになりました。その原因として、輸入がむずかしくなったことや、生産力が低くなったことなどがあげられます。

そこで政府は、必要な食品類を確保するため、食料を買い上げ、公平に配るために配給制度を実施しました。

米は、1941（昭和16）年4月から、みそやしょう油などの主な調味料は1942（昭和17）年から配給となりました。

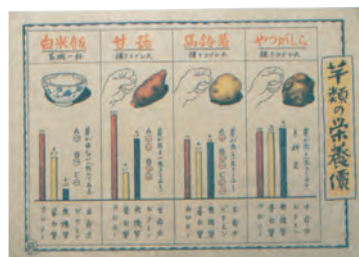
しかし、戦争が激しさを増すと、配給は遅れがちになり、次第にとどこおるようになりました。各家庭で、食料をつくることも奨励^{しょうれい}されました。

1944（昭和19）年6月14日発行の『写真週報』第325号には、表紙に、麦畑となった日本橋通りの写真が紹介されています。食品の価格も上がり、一升^{いっしょう}4円だった米は、10円、15円と値上がりしていききました。

1945（昭和20）年は、冷害^{きょう}や風水害などの影響で全国的に大凶作となり、食料不足はますます深刻となりました。

また、「決戦食」として、芋づる、かぼちゃなどの種、昆虫などを使った料理も紹介されるようになりました。

食料事情は、終戦後もなかなかよくなりませんでした。



貯蓄を生みだす生活の合理化

（東京都蔵）

節約を促すための啓蒙^{けいもうよう}用として製作されたもので、食生活についても細かく記されている。

◆金属供出^{きやうしゆつ}

戦争を続けるためには、多くの戦闘機、軍艦や大量の武器を準備しなければなりませんでした。

日本は、これらの兵器をつくる資源に乏しい国でしたので、貿易以外の方法で資源を確保しなければならないと考えるようになりました。このことが、日本が戦争に突き進んだ理由の一つとする意見もあります。

軍や政府は、飛行機や兵器をつくるための鉄や銅などの金属を国民から集めました。これが金属供出です。政府は1941（昭和16）年9月1日、金属回収令を定め、国民から強制的に金物を出させるようにしました。金属でできた鍋などの家庭用品はもとより、寺の鐘や銅像なども供出の対象となりました。

金属の回収は、隣組を通して行われ、回収が順調に行われると、感謝状が出されました。

金属でできた生活用品の代わりに、金属以外の原料でできたいろいろな生活用品が出まわるようになったのもこの頃です。それは「代用品」と呼ばれる品々で、竹でできたヘルメット、陶器^{とうき}でできた羽釜^{はがま}、湯たんぽ、などが使われました。



竹製ヘルメット・布製バケツ・紙製メガホン
(江戸東京博物館蔵)



陶器の羽釜
(江戸東京博物館蔵)



金属回収感謝状
(港区立郷土歴史館蔵)



湯たんぽ
(江戸東京博物館蔵)

◆地中から発見された戦時下の品々

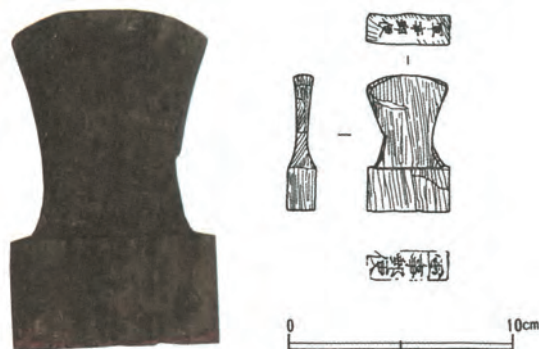
今日、港区内には160を超えるさまざまな遺跡が発見されています。こうした遺跡の発掘調査を行うと、ときおり戦争関係の資料（遺物）が発見されます。

港区麻布台一丁目にある豊後臼杵藩稲葉家・出羽米沢藩上杉家屋敷跡遺跡（元郵政省飯倉分館構内遺跡）出土遺物もその一例です。

ここでは、焼夷弾、「軍事郵便」の印、などとともに、防衛食容器などが出土しています。

防衛食容器は、直径約8センチメートル、高さ約9.5センチメートルの容器を、厚み約1.0～1.5センチメートルの蓋で密閉した陶器の器で、佃煮のような保存が効く食料を入れたと伝えられています。

戦時中、郵便物は書かれている内容を調べられました。検閲と呼ばれていますが、検閲済みの郵便物には「検閲済」の印が押されました。また、従軍する軍人らが発信する郵便、またはこれらの人に



「軍事郵便」の印

（港区立郷土歴史館蔵）

あてた郵便を軍事郵便といいます。これらの郵便物には「軍事郵便」の印が押されました。

食器の生産にも制約がつけられました。口の部分に、緑色の二重線がつけられたどんぶりには「岐／912」の文字が書き込まれていますが、岐阜県の912号窯で焼かれたことをあらわしています。

また、戦争への意欲を高めるようなデザインの製品もつくられました。桜、歩兵と艦上爆撃機を描いた子ども用の碗は愛知県瀬戸市内の窯で焼かれたものです。



防衛食容器

（港区立郷土歴史館蔵）



戦時中に生産された磁器の器

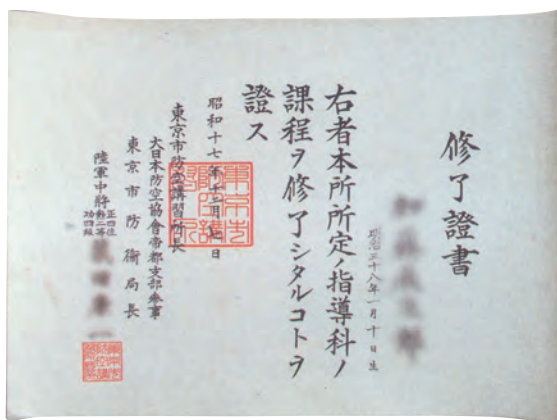
（港区立郷土歴史館蔵）

防空

1937（昭和12）年4月、政府は「防空法」を公布するとともに、戦争に勝利するためには、国民が一丸となって防衛に当たることが必要だと訴えました。

夜間の空襲に備えて、家中の電灯を黒い布でおおい、明かりが屋外へ漏れる事を防ぐ「灯火管制^{とうかかんせい}」をしきました。戦時中、夜の港区は暗闇に包まれました。服装も、質素で、空襲時に動きやすいものが奨励され、女性はおんぺ、男性は膝下から足首までをおおうゲートルの着用が模範とされました。

各家庭には、防毒マスク、防空頭巾^{ぼうどくずきん}、鉄かぶとが備えられ、消火器具も常備されましたが、常備されたものは、水を入れるためのバケツ、火の粉をたたき落とす火たたき、消火用の砂袋といった、粗末なものでした。



防火訓練「防空講習所指導課程」修了證書
（港区立郷土歴史館蔵）



町会で作った防空壕^{ごう}
（『東京大空襲秘録写真集』より）



隣組の防火訓練
（『東京大空襲秘録写真集』より）



（港区立郷土歴史館蔵）

語り継がれる戦時下の暮らし

戦争中から終戦直後の暮らしは、戦争を体験した人にとって、忘れたくても忘れることのできない思い出となりました。ここでは、戦時下の暮らしについて語ってくださったお二人の記憶から、当時の様子を考えてみます。

H・Yさんの記憶

苦しかった配給生活

昭和十四年九月に価額統制令が出てこの日の値段で、一切の物価値段が抑えられた。昭和十四年十二月に木炭が配給となり、翌年に入ると米や小麦など主食が配給制となり、各世帯の家族構成によって配給通帳が渡された。更にマッチは一日五本。砂糖は一ヶ月一人半斤（三百グラム）、魚は一人十匁（三十七・五グラム）味噌一人一ヶ月百八十三匁（六百八十グラム）砂糖は茶碗に一杯。野菜は一週間一人五十匁（百八十七・五グラム）などと耐乏生活を強いられた。これも配給所への入荷次第で遅配が続くようになった。東京下町の大空襲で精米所が焼失し、玄米のままで配給された時には各家庭では一升ビンに入れて棒でコツコツと主婦達は長時間かけて搗き、多少なりとも白米にして炊いた。

衣料品については一人一人に衣料切符を渡されたが、品物が不足で自由に購入することは困難であった。一方、ガソリン、石油などは極度に欠乏し、配給が困難でバスや乗用車には木炭車が現れ、車体の後部に大きな木炭釜を取り付けてエンジン

を回し、スピードは出ないが街を走り出した。

I・Aさんの記憶

私たち家族は、芝区田村町に長く住んでいた。

・・・

空襲が激しくなったので学童疎開が始まった。次男は栃木県鬼怒川へ、長女も保母になって一緒に疎開した。残る四人の子供と主人と私たちは食糧難にあえぎながら麻布のそば屋で雑炊を売ると聞けば、乳のみ子にも一人分もらえるので一人背負って小さな子の手を引いて並んだ。菓子パンニツ「一人分」朝六時に売ると聞けば子供を起こして並んだ。それでも到底足りず警察に応急米をなんども買いに行つて叱られたこともあった。そのうち強制疎開で田村町から新橋六丁目に移った。芝病院の並びの水道が断水してしまい、バケツ一杯の水を御成門の先までもらいに行ったり、赤れんが通りのマンホールまで水を汲みに行ったり、焼けてしまったお米屋さんで焼米をくれると言うので並んだこともあった。

・・・

戦争と女性^{じょせい}

女性の力

アジア・太平洋戦争は、まさに国全体をあげての総力戦でした。

多くの男性が兵士として動員されると、国内では女性が貴重な働き手として活動을続けました。1941（昭和16）年12月には「^{こくみんきんろうほうこくきょうりょくれい}国民勤労報国協力令」が施行され、14歳から25歳までの結婚前の女性に年間30日の労働が義務づけられました。1944（昭和19）年8月になると、「^{ていしん}女子挺身勤労令」が出され、12歳から40歳までの女性に1年間の労働が義務づけられました。

また、戦争によって働き手が不足するようになることから、女性には多くの子どもを産むことも期待されるようになりました。女性にとって、子どもを産み、育てることは、国に尽くすことと考えられたのです。

節約、貯蓄など、戦争のために日々の暮らしを送ることも、国内に残った女性たちに課せられた大きな役目でした。



戦時貯蓄債券

（港区立郷土歴史館蔵）



女子教練



隣組主婦たちの勤労奉仕



八百屋の配給に行列する主婦たち
（3枚の写真はいずれも『東京大空襲秘録写真集』より）

愛国婦人会と国防婦人会

満州事変が起こると、出征する兵士の無事を祈り、慰問品^{いもん}を配るようになり、またさまざまな献金活動が行われるようになります。こうした活動を支えた女性の団体が婦人会でした。

もっとも早くつくられていた婦人会のひとつが、1901（明治34）年に結成された「愛国婦人会」でした。満州事変が起きたとき、いち早く活動を開始したのも愛国婦人会でした。愛国婦人会は、緑の上っ張りに「愛国婦人会」と白く染め抜かれた紫色のたすきがトレードマークでした。会員数は、1937（昭和12）年の末には338万人に達していました。

1931（昭和6）年3月には、文部省の後押しで「大日本連合婦人会」がつけられました。

翌年の3月には、「大阪国防婦人会」がつけられました。大阪国防婦人会は、「台所から出て兵士の見送りや出迎えに行き、身体を使ってお世話をする」ことをモットーとする庶民的な団体に育ち、一般民衆も大いに認めるようになりました。そのうえ陸軍省が活動の後押しをしたこともあって、活動の範囲は短期間で全国に広まり、1932（昭和7）年10月には「大日本国防婦人会」と改名されました。大日本国防婦人会のトレードマークは、白いかっぽう着とたすきでした。

大日本国防婦人会は、国や社会のために奉仕すること、身を正しくし、家を守ることを基本的な決まり事としていました。1943（昭和18）年に入ると、ことさら母親としての役割が強調されるようになりました。子どもが少年航空兵となるように育てる役割を背負わされたといえます（藤井忠俊『国防婦人会』）。

戦時下、女性もまた国によって行動や活動が管理されました。



大日本国防婦人会のバッジとたすき
（港区立郷土歴史館蔵）

戦争と子ども

遊び

戦争は、子どもたちにとっても一大事でした。

日本の軍国主義化が進むにつれ、子どもの遊びも軍事色が強くなっていきます。外では戦争ごっこがはやり、おもちゃも戦争に関係したものがあたりまえのように広まりました。

1938（昭和13）年に金属のおもちゃが製造できなくなると、紙や木でできたおもちゃが主流となります。おもちゃはまた、戦争のことを子どもたちに教え込む材料ともなりました。



戦時下の子どもたち

教育

学校教育もまた、戦争教育が中心になっていきます。

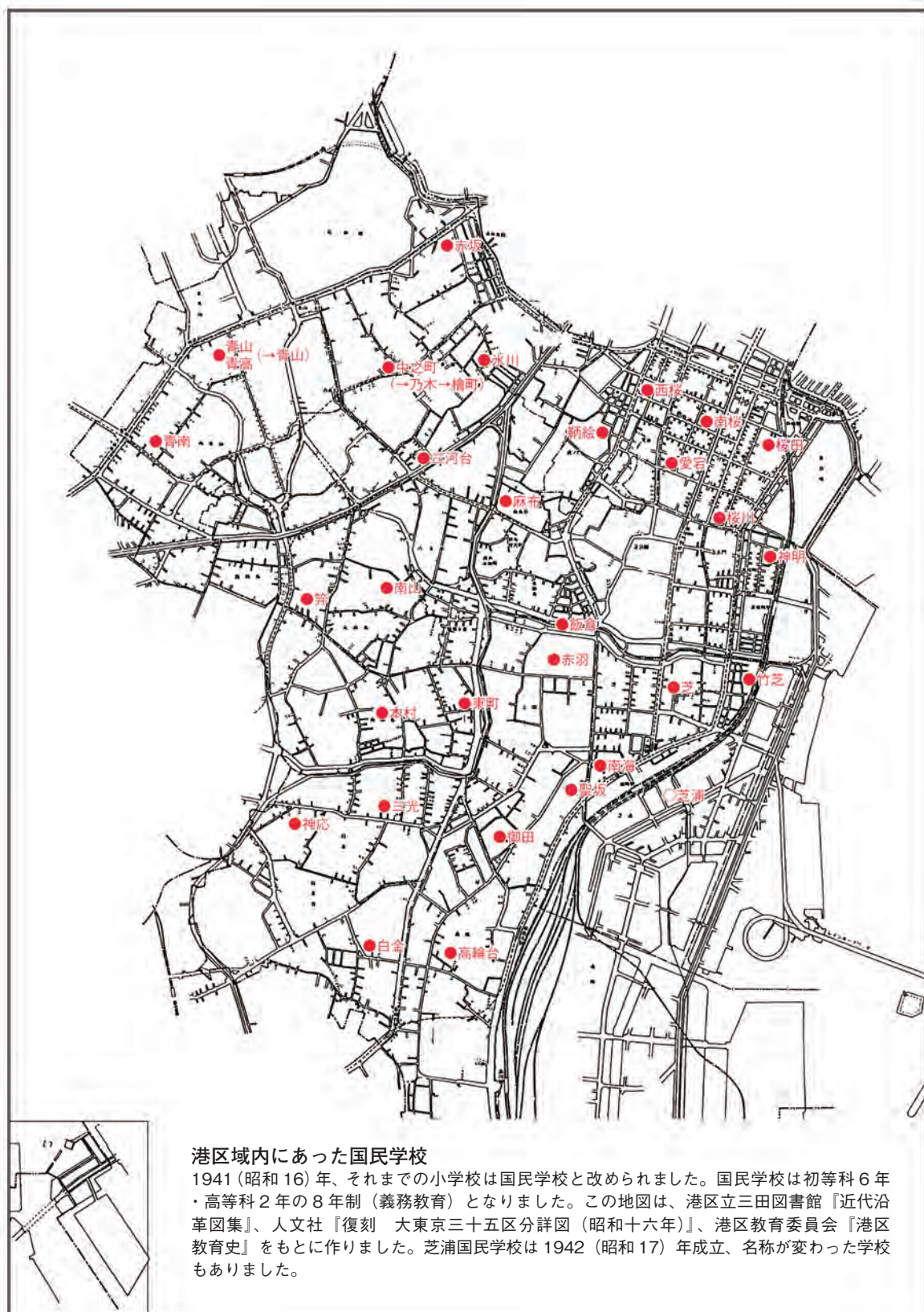
1941（昭和16）年には、それまでの尋常じんじょう小学校が国民学校へ変わり、義務教育の年数は、初等科6年と高等科2年とされました。尋常小学校時代の義務教育年限が6年でしたから、国民学校になってからは2年間延びたこととなりますが、戦争のため実施は延期され、行われることはありませんでした。

授業内容にも戦争の色が強くあらわれるようになり、竹やりなどの武道の授業が始まりました。

戦時中、子どもたちは「少国民」と呼ばれましたが、教育の目的は、戦争を続けるための「理想の少国民」をつくることでした。



（『港区教育史料集』より）



学童疎開^{そかい}

1943（昭和18）年12月10日、文部省は六大都市（東京・名古屋・京都・大阪・神戸・福岡）の学童^{えんこそかいそくしん}の縁故疎開促進を発表しました。1944（昭和19）年6月には、大都市の学童（国民学校初等科の3年生から6年生。のち1、2年生も）を、近郊農村や地方のまちへ移動（疎開）させることとなりました。学童疎開のはじまりです。

疎開には、各家庭が親戚などに預ける縁故疎開と、学童と教師とを一緒に疎開させる集団疎開^{しんせき}がありました。港区内の国民学校児童の集団疎開先は、栃木県、山梨県、三多摩^{さんたま}でした。疎開先には、旅館や寺院が選ばれ、教師と寮母が付き添いました。



疎開地に着いた南桜国民学校の学童（部分）
（港区立三田図書館『戦乱と港区』より）

1944（昭和19）年8月29日に、栃木県塩原町へ向かった桜田国民学校の児童の様子を見てみましょう。

児童は3年生から6年生までの283名、8名の職員と9名の寮母に付き添われて塩原町へ入りました。塩原町では3軒の旅館に分かれて投宿し、両親や兄弟と別れて、勤労奉仕や学業にいそしみました（『平和への願いを込めて-今語りつぐ戦争の体験-』より）。

疎開先での生活にはいろいろな苦労がありました。特に1945（昭和20）年ころからの食糧不足は深刻でした。

一方、保護者の経済的な事情から疎開ができなかった学童も少なくありませんでした。さらには、卒業をひかえて東京に戻ってきた後、空襲で被災した学童や、終戦後、迎えに来てくれるはずの家族が皆亡くなってしまった学童もいました。

終戦、そして復興へ

8月15日

1945（昭和20）年8月6日午前8時15分、広島に人類史上初の原子爆弾が落とされました。さらに、その3日後、8月9日午前11時2分に長崎に原子爆弾が落とされました。

このころの日本は、国内では主要都市のほとんどが空襲によって焼野原となり、国外の日本軍は敗戦に次ぐ敗戦で、戦争を続ける力は失われていました。

1945（昭和20）年5月7日にはドイツが無条件降伏し、7月17日にはアメリカ、イギリス、ソ連※の首脳がポツダムで会談を行いました。ドイツの戦後処理やこの世界戦争をどう終わらせるかなどについての話し合いの結果は、7月26日、ポツダム宣言として世界へ示されました。広島への原爆投下は、ポツダム宣言から11日目のことでした。

8月8日にはソ連※が参戦、満州や樺太への侵攻を開始しました。翌日には、長崎が原爆に襲われました。

そして、1945（昭和20）年8月15日正午、天皇が日本の降伏を告げました。8月30日には連合国最高司令官マッカーサーが日本に上陸し、アメリカを主力とする連合軍の本格的な占領が始まりました。

この日、千葉県せんりょうの九十九

里浜やほうたいの野砲隊にいたH・Yさんは、「もし、ポツダム宣言じゅだくの受諾が八月五日までに行われていれば、広島と長崎への原爆投下げんぱくとうかという惨事はなく、ソ連※の参戦もなく、したがって日本兵六十万人余のシベリア抑留よくりゅうはなく、中国残留孤児ざんりゅうこじも少数ですんだであろう。八月六日から九日までは、わずか四日間なのに「魔の四日間」になってしまった。そして、この四日間は永遠に取り戻せない。」と語っています（『平和への願いを込めて-今語りつぐ戦争の体験-』より）。

考えてみれば、明治時代の後半から日本は半世紀の間、ほとんど戦争とともにありました。この間に起った戦争をまとめて「50年戦争」と呼ぶ人がいます。19世紀の後半から20世紀の半ばにかけての時代は、戦争に巻き込まれたすべての人にとって、永遠に取り戻せない戦争の時代となりました。

※ソ連：1922～1991年にユーラシア大陸北部に存在した社会主義国家



8月15日の号外新聞

（港区立郷土歴史館蔵）

子どもたちの終戦

1945（昭和20）年8月15日は、子どもたちにとっても新しい時代の幕開けの日となりましたが、この日を子どもたちは、どんな思いで迎えたのでしょうか。

日本が負け、戦争が終わった時、多くの子どもたちは、学校の先生をはじめとする大人たちのことばに耳を疑い、とまどったようです。なぜなら、それまでとは違う話が次々とあたりまえのように飛び出してきたからです。敗戦を悔しがる子ども、家族との暮らしを喜ぶ子ども、子どもたちの思いはいろいろだったでしょう。そうした中で子どもたちは、時代の変化をいち早くつかみ取っていききました。



アメリカ兵に敬礼する子どもたち

— 1945（昭和20）年9月9日 —
（写真提供：昭和館）

一方、終戦直後には、戦時中にもまして悲惨な生活を送らなければならない子どもたちも、あちらこちらにあふれ出ていました。

こうした子どもの多くは、「戦争孤児」あるいは「戦災孤児」と呼ばれた子どもたちでした。映画「火垂るの墓」は、戦争によって孤児となった兄と妹の姿を描いた心に残る作品ですが、妹は栄養失調で亡くなり、兄は浮浪児（ふろうじ）となって餓死（がし）してしまいます。

港区の台場には、こうした孤児のための施設「東水園（とうすいえん）」が開かれていました。東水園は最初、第五台場（みはりじょあと）の見張所跡の建物が使われていましたが、後に第一台場の新しい施設に移りました。



東水園

（『みなとと百年
東京水上警察署のあゆみ』より）

復興へ

空襲などによって、ほとんどすべてを失った終戦直後の日本の経済や社会は、ひどく混乱した状態におちいりました。住む家が奪われ、物不足と深刻な食糧不足に終戦後の人々は苦しみました。戦争を体験した人の中には、戦時下よりも終戦直後のほうが、はるかにつらい思いをしたと語る人もあります。特に焼野原になった東京などの大都市の住民は、なけなしの金を払って日用品を手に入れたり、遠くまで食糧の買出しに出かけて行きました。

道路脇には、旧日本軍やアメリカ軍から横流しされた衣類や日用品などを売る人が現われ、こうした品々を売る店が立ち並び、闇市^{やみ}が誕生しました。

港区内には、新橋に大きな闇市がつくられました。初めは汐留側につくられた闇市は、間もなく旧桜田小学校の隣地に移されます。当時の写真には、大勢の人で混み合う闇市の様子が写されています。新橋の闇市は1946（昭和21）年7月23日に取りこわされますが、駅前広場には露店が並びました。その露店も、1951（昭和26）年4月にはなくなりました。



家を失い増上寺門前で暮らす家族

（写真提供：昭和館）



新橋公設市場

（写真提供：昭和館）

1946（昭和 21）11 月 3 日には日本国憲法が公布され、終戦直後から、（アメリカ主導の）民主主義国家としての国づくりが進められてきた日本は、終戦から 7 年が過ぎた 1952（昭和 27）年に、ようやく独立を認められました。そうしたなか、1950（昭和 25）年に始まった朝鮮戦争をきっかけに日本は立ち直りを見せ、好景気に支えられ飛躍的な成長をとげます。

1958（昭和 33）年には、電波塔としては、当時、世界で最も高い東京タワーが竣工、1964（昭和 39）年には東京オリンピックが開催されるなど、終戦から四半世紀を経て、戦後復興に一つの区切りが着きました。



東京タワー

（港区立郷土歴史館蔵）



貿易センタービルから見た港区 2016（平成28）年（「とっておきの港区 2016 Autumn」掲載）
写真に写っている地域は、1945（昭和20）年の空襲で、ほとんどが焼け野原になった地域です。

おわりに

－ 平和を創ること、守ること －

日本と大きな戦争との関係は、第二次世界大戦の終わりとともになくなるはずでした。もちろん、戦争が本当に終わったと心からいえない人はたくさんいます。しかし日本は、憲法で二度と戦争を行わないことを誓いました。日本にとって、日本人にとって、戦争の時代は終わったはずでした。

ところが、終戦から5年後の1950（昭和25）年、朝鮮半島で戦争が起こりました。日本がこの戦争に軍隊を送ることはありませんでしたが、日本の企業は兵器を提供しました。日本が、ふたたび戦争と関わりをもったのです。その後は、こうした活動も厳しく監視し、日本が戦争とかかわらないよう努力を積み重ねてきました。

一方、日本は、朝鮮戦争をきっかけに経済力を増し、終戦から10年もしない間にめざましい勢いで復興をとげ、多くの国々が目を見張りました。港区は、戦後復興を象徴するまちの一つと言えるかも知れません。かつて、歩兵第一・第三連隊や近衛歩兵第三連隊など、多くの軍事施設が置かれていた地域は今、ホテルや住宅、事務所ビル、美術館などが並ぶ、新しいまちへ変貌を遂げました。

ただ、世界に目を広げて見ると、今もなお数多くの尊い命が、地域間・民族間の紛争やテロ行為等により、私たちと同じ「人」の手で奪われています。また、世界で唯一の被爆国である日本をはじめ、世界中の多くの人々が非核を訴え続けていますが、未だ核兵器を保有し、あるいは核兵器の開発を進める国があります。さらに、人類の存続に関わる地球規模での環境破壊、飢餓、貧困、人権抑圧等の問題は、私たちが望む世界平和の実現をより困難なものにしています。

それでも私たちは、一人ひとりの生命や生活がおびやかされることのない、真に平和な世界をつくり、守り続けなければなりません。「平和」は、今を生きるわたしたち一人ひとりが、過去の悲惨な経験から学び、生まれた国や言葉、文化などの違いに関係なく、互いを認め合い、理解し合い、思いやることから創られるのではないのでしょうか。

未来を担うみなさんが、平和を創り守っていく担い手となってくださることを、そして、世界全体が真に平和な時代を迎えることを願ってやみません。

年表・近代の戦争と港区

※特に、港区に関わる事象は太字にしています。

時 代	西 暦	月 日	事 項
明治	4	1871	愛宕町旧柳沢邸に兵営設置
	5	1872	紀伊藩中屋敷に赤坂離宮設置 (陽暦9月5日)学制・学区制公布
		3月23日	新橋・横浜間鉄道開業
		8月3日	芝増上寺山内松蓮社に海軍水路局、赤羽に兵部省武庫司、芝公園内に海軍砲兵仮屯所を設置
		9月12日	芝愛宕下に東京鎮台歩兵第一連隊第一大隊、赤坂檜町に第二・第三大隊が駐屯(陸軍第一師団歩兵第一連隊の前身)
	6	1873	
	7	1874	11月2日 虎の門の日就社が「読売新聞」創刊
	8	1875	5月1日 慶應義塾演説館開館
	9	1876	3月21日 芝山内真乗院で水公社発会式を開催
	10	1877	2月 西南戦争開戦
	11	1878	11月2日 芝・赤坂・麻布各区誕生
	13	1880	1月25日 芝青松寺で交詢社発会式
	16	1883	11月 日比谷に鹿鳴館開館
	17	1884	5月 赤坂檜町に陸軍第一師団歩兵第一連隊移転
		7月	芝私立衛生会創設
	18	1885	12月22日 太政官制を廃し内閣制度創設
		12月	日本赤十字社病院創設
	19	1886	麻布三河台町に陸軍第一師団歩兵第一旅団司令部設置
	20	1887	青山練兵場設置
	21	1888	4月1日 麻布本村町に東京製綱株式会社設立
	22	1889	5月 麻布三河台町歩兵第一旅団司令部内に麻布大隊区司令部設置
		1月	陸軍第一師団歩兵第三連隊、麻布新竜土町に移設
		2月11日	大日本帝国憲法公布
		4月	芝田町四丁目に品川電燈株式会社設立
		5月1日	東京市誕生
	23	1890	第一回帝国議会開催
	24	1891	3月 青山南町一丁目に陸軍第一師団司令部移設
		4月25日	青山北町一丁目に陸軍大学校移転
			青山北町四丁目に霞ヶ関から近衛歩兵第四連隊移設
	26	1893	5月 赤坂一ツ木町に霞ヶ関から近衛歩兵第三連隊移転
	27	1894	8月1日 清国に宣戦布告(日清戦争)
		11月26日	慶應義塾学生、旅順口陥落祝賀の提灯行列挙行
			赤坂区報国会、芝区兵事義済会、麻布区兵事議会議設置
	29	1896	8月 青山南町一丁目に麻布三河台町から麻布連隊区司令部移転
	34	1901	2月1日 愛国婦人会創立
	37	1904	2月10日 ロシアに宣戦布告(日露戦争)
	38	1905	9月5日 日露講和条約締結
	39	1906	4月30日 青山練兵場で日露戦争凱旋観兵式挙行
	43	1910	8月22日 韓国併合に関する日韓条約調印
		12月7日	在郷軍人会麻布区連合分会創立
	44	1911	1月16日 在郷軍人会芝区・赤坂区連合分会創立
		2月15日	日本赤十字本社芝公園に創立
大正	元	1912	9月13日 明治天皇大喪、赤坂の自邸で乃木夫妻自刃
		12月	三田に三井倶楽部竣工(ジョサイア・コンドル設計)
	3	1914	7月28日 第一次世界大戦勃発(～1918.11)
		8月23日	ドイツに宣戦布告

※特に、港区に関わる事象は太字にしています。

時 代		西 暦	月 日	事 項
大 正	9	1920	12月	芝浦に芝浦野球協会発足(日本初のプロ野球)
	12	1923	9月1日	関東大震災
	14	1925	7月12日	愛宕山の東京放送局より本放送開始
昭 和	2	1927	5月28日 6月20日 12月30日	第一次山東出兵 日・米・英3カ国海軍軍縮会議開催(ジュネーブ、8月4日、失敗に終わる) 日本初の地下鉄(浅草-上野間)開通
	3	1928	2月20日 4月19日 6月29日 11月	初の普通選挙による総選挙 第二次山東出兵 治安維持法改正施行 大礼記念としてラジオ体操開始
	4	1929	10月24日	ニューヨーク株式市場大暴落。世界恐慌の始まり
	5	1930	4月22日 7月13日	ロンドン海軍軍縮条約締結 サッカー第1回ワールド・カップ、ウルグアイで開催 愛宕トンネル完成
	6	1931	9月18日	満州事変
	7	1932	1月28日 3月1日 5月14日 5月15日 5月26日 10月2日	第一次上海事変 満州国建国宣言 米の「喜劇王」チャップリン来日 5.15事件 斎藤実内閣成立。事実上の政党内閣時代の終り 外務省、リットン報告書を公表
	8	1933	1月30日 3月4日 3月27日	ヒトラー、独首相に就任 ルーズベルト、米大統領に就任、ニューディール政策の開始 国際連盟脱退
	9	1934	3月1日 4月21日 11月2日	白金台町二丁目に朝香宮邸(現東京都庭園美術館)竣工 関東軍、溥儀を満州国皇帝に就任させ、帝政を開始 渋谷駅前の忠犬ハチ公銅像除幕式 ベープ＝ルースら、米大リーグ選抜チーム来日
	11	1936	2月26日 11月7日	2.26事件 帝国議会議事堂(現、国会議事堂)落成
	12	1937	7月7日	盧溝橋事件(日中戦争始まる)
	13	1938	3月1日 4月1日 4月4日 11月3日	綿糸布配給統制規則公布(初の切符制) 国家総動員法公布 灯火管制規則公布 近衛首相、東亜新秩序建設を声明(第二次近衛声明)
	14	1939	7月8日 9月1日 12月26日	国民徴用令公布 独軍、ポーランドに侵攻(第二次世界大戦勃発) 朝鮮総督府、朝鮮人の氏名を日本式に改めさせる(創氏改名)
	15	1940	3月30日 4月 6月10日 9月23日 9月27日	汪兆銘、南京に中華民国政府を樹立 東京芝浦電気(株)、昼光色蛍光灯生産開始(潜水艦などに使用) 伊、英仏に宣戦布告 北部仏印へ武力進駐開始 日独伊三国同盟調印
	16	1941	3月31日 4月1日 4月13日 5月20日 11月22日 12月8日	生活必需物資統制令公布 小学校を国民学校と改称 日ソ中立条約締結 東京港開港 国民勤労報国協力令公布(12月1日施行) 真珠湾奇襲、米英に宣戦布告
	17	1942	1月9日 2月1日 3月 4月18日 5月26日 6月5日	学徒勤労動員開始 みそ・しょう油の切符配給制、衣料の点数切符制実施 大日本婦人会芝支部発足、全婦人団体統合 米陸軍機16機、東京・名古屋・神戸などを初空襲 日本文学報国会創立 ミッドウェー海戦始まる(～6月7日)
	18	1943	2月1日	日本軍、ガダルカナル島より撤退開始

※特に、港区に関わる事象は太字にしています。

時 代	西 暦	月 日	事 項
昭 和	18	1943	5月29日 アッツ島の日本軍守備隊全滅 6月25日 学徒戦時動員体制確立要綱により、学徒の軍需生産従事を規定 9月8日 伊、無条件降伏 8月-9月 上野動物園で猛獣を毒殺 10月21日 神宮外苑で出陣学徒壮行会举行
	19	1944	6月6日 連合軍、ノルマンディー上陸 6月19日 マリアナ沖海戦（～6月20日） 8月4日 学童集団疎開開始 8月22日 沖縄からの疎開船「対馬丸」、米潜水艦の攻撃で沈没 10月24日 日本軍、レイテ沖海戦で連合艦隊の主力喪失（～10月26日） 11月24日 マリアナ基地のB29が、東京を初空襲
	20	1945	2月4日 ヤルタ会談（～2月11日） 3月9-10日 東京大空襲 4月1日 米軍、沖縄本島に上陸開始 5月7日 独軍、連合国に無条件降伏 5月23-25日 東京山の手地区大空襲 6月8日 御前会議、本土決戦を採択 7月17日 ポツダム会談（～8月2日） 8月6日 広島に原子爆弾投下 8月8日 ソ連、日本に宣戦布告 8月9日 長崎に原子爆弾投下 8月15日 終戦の詔書が放送される（「玉音放送」） 9月 赤坂檜町の歩兵第一連隊、連合軍に接收 10月24日 国際連合、正式に発足
	21	1946	11月3日 日本国憲法公布 12月19日 仏軍、ベトナム軍を攻撃（第一次インドシナ戦争勃発）
	22	1947	3月15日 芝、麻布、赤坂区統合、港区誕生
	23	1948	5月15日 アラブ諸国、イスラエル攻撃（第一次中東戦争勃発、～1949年3月10日）
	24	1949	4月4日 北大西洋条約機構（NATO）成立 11月3日 湯川秀樹、ノーベル物理学賞受賞
	25	1950	6月25日 朝鮮戦争勃発
	26	1951	9月8日 サンフランシスコ講和条約調印。日米安全保障条約調印
	27	1952	7月19日 第15回オリンピック（ヘルシンキ、～8月3日）。日本、16年ぶりに参加
	28	1953	2月1日 テレビの本放送開始 7月27日 朝鮮休戦協定調印
	29	1954	3月1日 第五福竜丸、ビキニの米水爆実験で被災
	33	1958	12月23日 東京タワー完工式
	35	1960	1月11日 赤坂檜町の旧歩兵第一連隊舎、接收解除により防衛庁庁舎に
	37	1962	10月22日 キューバ危機
	39	1964	9月17日 東京モノレール開業 10月1日 東海道新幹線開業 10月10日 東京オリンピック開催（～10月24日）
	40	1965	米軍北爆開始（米、ベトナム戦争へ本格的に軍事介入）
	42	1967	12月11日 佐藤首相、非核三原則を言明
	45	1970	3月5日 核兵器不拡散条約（NPT）発効 3月14日 日本万国博覧会開幕（～9月13日）
	46	1971	6月17日 沖縄返還協定調印式
	47	1972	5月15日 沖縄の施政権返還 9月29日 日中共同声明発表
	48	1973	1月27日 ベトナム和平協定調印（米軍のベトナム全面撤退）
	50	1975	4月30日 サイゴン陥落（ベトナム戦争終結）
	54	1979	12月27日 ソ連、アフガニスタンへ侵攻（～1989年2月15日）
	55	1980	9月22日 イラン・イラク戦争勃発
	60	1985	8月15日 港区平和都市宣言
	61	1986	4月26日 ソ連、チェルノブイリ原子力発電所で事故
	63	1988	8月20日 イラン・イラク戦争停戦

※特に、港区に関わる事象は太字にしています。

時 代	西 暦	月 日	事 項
平 成	2	1990	8月2日 イラク軍、クウェート侵攻
			10月3日 東西ドイツ、国家統一
	3	1991	1月17日 湾岸戦争(～2月28日)
			12月26日 ソ連最高会議共和国会議、ソ連消滅宣言採択
		4月	初の自衛隊海外派遣閣議決定
	4	1992	4月1日 日本非核宣言自治体協議会へ加盟
			6月15日 PKO協力法成立
	9	1997	9月18日 対人地雷全面禁止条約を採択(ノルウェー・オスロ)
			12月1日 地球温暖化防止京都会議開幕
	13	2001	9月11日 米で9.11同時多発テロ
			10月7日 米、アフガニスタンを空爆
	15	2003	3月20日 イラク戦争開戦(～2011年12月14日)
	17	2005	4月13日 核テロリズム防止条約を採択(アメリカ・ニューヨーク)
			8月15日 港区平和都市宣言20周年、区立芝公園内に「平和の灯」設置及び「被爆アオギリⅡ世・クスノキⅡ世」植樹
令 和	18	2006	10月9日 北朝鮮、核実験実施を発表
	22	2010	4月1日 平和市長会議(現:平和首長会議)へ加盟
	23	2011	3月11日 東日本大震災
	27	2015	8月15日 港区平和都市宣言30周年
	29	2017	7月7日 核兵器禁止条約を採択(アメリカ・ニューヨーク)
	3	2021	1月22日 核兵器禁止条約発効
	4	2022	2月24日 ロシア軍によるウクライナ侵攻
	6	2024	12月10日 日本原水爆被害者団体協議会がノーベル平和賞を受賞

●この年表は、『江戸東京学事典』(三省堂、1987)、平成17年度港区立港郷土資料館テーマ展「戦争の時代と港区」解説シート、『昭和・平成 現代史年表 大正12年▶平成20年』(小学館、2009)を参考に作りました。

◆主な参考文献 (五十音順)

- 青山保他編『近代日本文化論 1 近代日本への視角』岩波書店、1999
同『近代日本文化論 10 戦争と軍隊』岩波書店、1999
有馬頼義編『東京大空襲 19 人の証言』講談社、2004
李順愛『戦後世代の戦争責任論 - 『敗戦後論』をめぐる -』(岩波ブックレットNo. 467)、1998
板橋区立郷土資料館『板橋の平和 - 戦争と板橋 語りつぐ苦難の日々 -』、1995
一ノ瀬俊也『戦場に舞ったビラ 伝手で読み直す太平洋戦争』(講談社選書メチエ)、2007
伊東壮『新版 1945 年 8 月 6 日』(岩波ジュニア新書 156)、1989
伊波園子『ひめゆりの沖縄戦』(岩波ジュニア新書 207)、1992
海野十三『海野十三敗戦日記』(中公文庫 743)、2005
江戸東京博物館『東京大空襲 戦時下の市民生活』
江波戸昭『戦時生活と隣組回覧板』中央公論事業出版、2001
岡野薫子『太平洋戦争下の学校生活』新潮社、1990
小澤真人他『赤紙 男たちはこうして戦場へ送られた』創元社、1997
表参道が燃えた日 - 山の手大空襲の体験記 - 編集委員会『表参道が燃えた日 - 山の手大空襲の体験記 -』、2008
金田茉莉『東京大空襲と戦争孤児 隠蔽された真実を追って』影書房、2002
河野司編『二・二六事件 獄中手記・遺書』河出書房新社、1972
神田文人他『増補版 昭和・平成 現代史年表 大正 12 年▶平成 20 年』小学館、2009
北博昭『二・二六事件 全検証』(朝日選書 721)、2003
清沢洌『暗黒日記 1942 - 1945』山本義彦編(岩波文庫 青 178-1)、1990
近現代史編纂会『写説 占領下の日本 敗戦で得たもの、失ったもの』ビジネス社、2006
倉沢愛子他『岩波講座 アジア・太平洋戦争 1 なぜ、いまアジア・太平洋戦争か』岩波書店、2005
同『岩波講座 アジア・太平洋戦争 6 日常生活の中の総力戦』岩波書店、2006
同『岩波講座 アジア・太平洋戦争 8 20 世紀の中のアジア・太平洋戦争』岩波書店、2006
小森陽一監修『戦争への想像力 いのちを語りつぐ若者たち』新日本出版社、2008
早乙女勝元『東京大空襲 - 昭和 20 年 3 月 10 日の記録 -』(岩波新書 775)、1971
同『戦争と子どもたち』河出書房新社、2003
早乙女勝元編著『写真版 東京大空襲の記録』(新潮文庫 さ -18-4)、1987
早乙女勝元編『母と子でみる 1 東京大空襲』草の根出版会、1983
同『母と子でみる 3 日本の空襲』草の根出版会、1988
早乙女勝元監修『目でみる戦争とくらし百科』日本図書センター
佐藤卓己『八月十五日の神話』(ちくま新書 544) 筑摩書房、1995
佐原真『戦争の考古学』春成秀爾他編(佐原真の仕事 4) 岩波書店
沢田猛『空襲に追われた被害者たちの戦後 東京と重慶 消えない記憶』(岩波ブックレットNo. 750)、2009
下嶋哲朗『平和は「退屈」ですか 元ひめゆり学徒と若者たちの五〇〇日』岩波書店、2006
関口昭治編『子どもたちに伝える東京大空襲』ドメス出版、1985
瀬戸環他編集『むかし、みんな軍国少年だった 小二から中学生まで二十二人が見た 8・15』G.B.、2004
太平洋戦争研究会『写説 戦時下の子どもたち』ビジネス社、2006
同『知られざる証言者たち 兵士の告白』新人物往来社、2007
武内俊三編『東京大空襲秘録写真集』雄鶏社、1953
玉井清『戦時日本の国民意識 国策グラフ誌『写真週報』とその時代』慶応義塾大学出版会、2008
東京大空襲六十年の会『図録「東京大空襲展」 - 今こそ真実を伝えよう -』、2005
東京都港区『新修 港区史』、1979
東京都港区役所『港区史』、1960
東京都港区立三田図書館『戦乱と港区』、1969

豊島区立郷土資料館『1995 年度特別展 戦争と豊島区』、1995
 長崎総合科学大学平和文化研究所編『新版 ナガサキー 1945 年 8 月 9 日』(岩波ジュニア新書 260)、1995
 成田龍一『日本近現代史④ 大正デモクラシー』(岩波新書 1045)、2007
 日中韓 3 国共通歴史教材委員会『未来をひらく歴史 東アジア 3 国の近現代史』高文研、2005
 日本戦没学生記念会編『新版 きけわだつみのこえ 日本戦没学生の手記』(岩波文庫 青 157-1)、1995
 羽島知之編著『資料が語る戦時下の暮らし』麻布プロデュース、2004
 原田敬一『日本近現代史③ 日清・日露戦争』(岩波新書 1044)、2007
 藤井忠俊『国防婦人会』(岩波新書 298)、1985
 逸見勝亮『学童集団疎開史 子どもたちの戦闘配置』大月書店、1998
 松浦総三他編『東京大空襲・戦災史 第 4 巻』財団法人東京大空襲を記録する会、1973
 同 『東京大空襲・戦災史 第 5 巻』財団法人東京大空襲を記録する会、1974
 港区戦争・戦災体験集編集委員会『平和への願いを込めてー今語りつぐ戦争の体験ー』
 港区企画部文化・国際交流担当、2005
 みなと女性史をつくる会編『東京タワー、伝統と先端の街 聞き書き みなと女性史』
 財団法人港区スポーツふれあい文化健康財団 港区立男女平等参画センター(リーブラ)、2008
 山中恒『子どもたちの太平洋戦争ー国民学校の時代ー』(岩波新書 356)、1986
 同 『暮らしの中の太平洋戦争ー欲シガリマセン勝ツマデハー』(岩波新書 78)、1989
 同 『アジア・太平洋戦争史 同時代人はどう見ていたか』岩波書店、2005
 吉田裕『日本近現代史⑥ アジア・太平洋戦争』(岩波新書 1047)、2007
 同 『日本の軍隊ー兵士たちの近代史ー』(岩波新書 816)、2002
 吉見義明『従軍慰安婦』(岩波新書 384)、1995
 立命館大学国際平和ミュージアム『立命館大学国際平和ミュージアム常設展示詳細解説』、2005

*日本が関わった戦争については、ここに掲げた参考文献以外に数多くの図書・雑誌などが刊行されていますので、
 ぜひご参照ください。

◆編集後記

本書は、港区総務部人権・男女平等参画担当が、港区教育委員会ほか関係機関の協力のもと、作成しました。

- ・戦争体験談は『平和への願いを込めてー今語りつぐ戦争の体験ー』（港区戦争・戦災体験集編集委員会編、2005）、『東京タワー、伝統と先端の街 聞き書き みなと女性史』（みなと女性史をつくる会編、2008）より抜きました。
- ・本書に使用した写真について、ご連絡先のわからない権利者の方がいました。
- ・引用文をより読みやすくするため、適宜ふりがなを加えました。
- ・本書についてのお問い合わせ等は港区総務部人権・男女平等参画担当まで。また港区の戦争関係資料については、港区教育委員会事務局教育推進部図書文化財課文化財係（TEL.03-6450-2869）へお問い合わせください。

◆協力者一覧

本書を作成するに当たり、次の機関・方々から、多大なご助力をいただきました。心から御礼申し上げます。

赤澤春彦	及川吉生	落合則子	今野信義	早乙女勝元	鈴木克己	滝口正哉
田中実穂	永井永光	西木浩一	西村直子	東龍治	三尾規子	龍澤潤
江戸東京博物館	江東区教育委員会	昭和館	東京都	東京都公文書館		
東京大空襲・戦災資料センター						

（五十音順・敬称略）

刊行物発行番号 2024135-6421

平和を創り、守るためにー今、戦争を考えるー

[発行日]	2006（平成18）年 3月
	2010（平成22）年 3月 2刷
	2011（平成23）年 3月 3刷
	2011（平成23）年11月 4刷
	2012（平成24）年12月 5刷
	2013（平成25）年12月 6刷
	2017（平成29）年 1月 7刷
	2019（平成31）年 2月 8刷
	2021（令和 3）年 1月 9刷
	2023（令和 5）年 1月10刷
	2025（令和 7）年 1月11刷

[編集・発行]	港区・港区教育委員会
	〒105-8511 港区芝公園一丁目5番25号
	電話 03(3578)2111(内線) 2014



区 の 木



ハナミズキ
ミズキ科
北米原産 外来種
落葉広葉樹

区 の 花



アジサイ
ユキノシタ科
日本（関東南部）原産
落葉広葉樹 1.5～2.0m



バラ
バラ科
日本、中国、欧州原産
常緑落葉低木つる



港区は、みどりの保全とごみの減量に努めています。
この「平和を創り、守るために～今、戦争を考える～」は、
古紙を活用した再生紙を使用しています。